

佐竹先生を偲んで

経済学部教授 湯沢 威

私が学習院大学に赴任したときの経済学部長が佐竹先生であった。新任の私にさまざまなアドバイスをしていただき、またわざわざ学習院舎宅の拙宅まで住まいの状況を見に来ていただいたりした。新任者への思いやりの気持ちをひしひしと感じたことをいま思い出している。

私が佐竹先生の名前を知るようになったのは、学習院大学に赴任するずっと以前のことであった。先生の専門である労務管理と私の専門とは直接関係はないが、研究の対象が同じ交通という点では密接な関連があったのである。すでに先生の交通労働に関する名著『交通労働の研究』を読ませていただいております、その明快な説明と手堅い実証には多くを教えられていた。この分野の研究はわが国でもパイオニア的な研究分野の一つであり、研究過程では多くのご苦勞があったのではないかと推察している。

私が先生にお会いした最後は昨年の10月、本学の百周年記念会館で行なわれた鉄道史学会の全国大会の時であった。先生が鉄道史学会にお入りになったのは、定年を迎えられたのちのことであり、時間的余裕のなかであらためて歴史に関心をもたれたものと拝察していた。私が当番校として学会開催に責任をもっていたので、先生の名を出席者名簿に発見したときには内心嬉しく思った。鉄道史学会でお会いしたときは、いつものスタイルでいつもの笑顔を見せられ、2年前にお目にかかった時とほとんど変りがないので、先生もお元気で長生きされるのではないかと思った。

先生が若いときに大病されていたことは、ご自身からのお話で伺っていたが、戦前・戦中の食糧難の時代に青春を過ごした俊英が、胸の病気を患った話は良く聞いていたので、とくに驚きもなかった。若いときに大病を患った方のほうが、その後人一倍生活には養生されて、却って長生きされるというケースを知っていたからでもある。たしかに先生の外見は弱々しく見えるが、先生の歩き方はさっそうとしており、日頃テニスで鍛えているつもりの私の脚が追い付くのにも苦勞するほどであった。おそらく先生ご自身も長生きには自信があり、それがかえってこの度は裏目にでてしまったのかもしれない。

同じ交通を研究する立場から先生にはまだまだ多くのことを教わりたかった。たまたま1990年12月号の『運輸と経済』が発行所から送られてきた。それは私がある折りに参加した座談会の模様が載っていたからであるが、その号には佐竹先生の重厚な論文が掲載されていることを発見した。「運輸労働市場と労働力不足一道路貨物運送労働の問題点」と題されたその論文は、今日の日本経済が直面する大問題の一つを極めて明快にしかも国際比較の視点もいれて分析しておられた。これまでの「日本的経営」の一つの特色としてジャスト・イン・タイムが指摘されて久しいが、しかし現在、交通労働力の不足や公害問題などからその見直しがせまられている。この論文はこのような今日の問題をさまざまな角度から論じており、私はおおいに教えられるところが多かった。しかし事態は今日もおお激しく変化しつつあり、先生が研究されようとした分野にはいまだ多くの未解決の問題が残されているはずである。このような重要な時にこそ私は先生からいろいろお考えを伺いたかった。しかし、なによりも一番無念に思っておられるのは、研究半ばで他界せざるをえなかった先生ご自身であろう。今は先生が予見された交通労働の行く末がどのようになるのかを遠いところから見ていただくほかはない。

先生のご冥福をお祈り申し上げます。